

Q： 崩壊熱と核分裂反応の熱とはどう違うのですか？

A： 原子炉が停止した、核分裂連鎖反応が停止した。だが熱は出し続ける。確かに不可解な現象です。地震がきた 緊急措置として自動的に制御システムが働き、全ての制御棒が挿入されて核分裂反応は停止されました。

しかし、燃料棒の中にはまだ、核反応で出来た種々の物質が詰まっています。それらが少しずつ、放射線などのエネルギー - を放出しながら安定的な状態に戻っていくのですが、その過程で熱を出し続けていくのが「崩壊熱」と呼ばれるモノです。

ではどの位の熱量かというと、原子炉停止直後の崩壊熱量は、運転中に発生している熱量の 1 % くらいの熱が出ます。僅か 1 % とはいえ、一般家庭用浴槽約 10 杯分 (3 トン) の水を 1 秒で沸騰させるくらいの熱量を発生します。

この崩壊熱は 1 週間くらいで大分下がります。ところがその後は少しずつしか下がりません。福島第一原発事故でのステップ 2 はこの崩壊熱の冷温化で、9 月 28 日 東電は

1 ~ 3 号機に関し原子炉圧力容器底部の温度がいずれも 100 度以下になったと発表した。

具体的には 9 月 28 日現在、1 号機が 78 、2 号機 99.4 度、3 号機 79 度 これで冷温停止状態を宣言するわけにはいかない、それは今回の事故では原子炉からの飛散した放射性物質の飛散状況が判らない、冷温停止状態とは未だ宣言できない。永続的に原子炉を冷やすためのシステムも完成されたモノではない。

Q： ステップ 2 の目標である冷温停止でも安心はできないのですか？

A： ステップ 2 は安全三原則の「冷やす」ですが、1 ッのステップであって、道半ばの一里塚に過ぎません。

配管の中には予期せぬ水素が溜っている可能性もある。二次、三次の災害の可能性は否定できないとして、冷温化に一步近づいただけと、宣言した。

冷温化になっても完全に冷えて作業が出来るようになるには、未だ 1 年以上はかかり、ただらと冷えていくのです。

更にもう一つ予断を許せない事には、冷温化が出来たとしても、第 1 ~ 3 号機で何らかの事故、事件が発生し原子炉への注水が中断し 38 時間過ぎると、核燃料が再び溶けだし、多量の放射性物質が放出される最悪のシナリオが存在する。

注水が止まる原因は、炉内に注水しているポンプの故障、電源の喪失、水タンク等水源の喪失、注水ラインの破壊等があるが、これらが単独で起きた場合は修理可能であっても、複数の事故が同時発生であれば危険だ。例えば再び地震、津波等の災害が起きた場合で、絶対無いとは断言できない。

現在 100 度未満の冷温停止状態にあるが、もし冷却水注入が停止した場合、1 時間で 48 ~ 51 上昇し、18 ~ 19 時間後には水素が発生する 1200 度に達し、再び水素爆発の危険になり、更に 38 ~ 50 時間後には燃料の再融解が始まり、圧力容器の底に溜った燃料が更に外側の格納容器に漏れ出すメルトダウンの悪夢の怖れがある。

安全宣言が出るまでは絶対に予断は許されないのです。

原発事故は人為的なもの、人間の心に隙が生まれた瞬間、神の火は、悪魔の劫火に変わる。核分裂は悪魔の劫火として生まれたモノ、それを人間が神の火に換えたのだから、